

日本人形

日本の伝統工芸技術の集大成です

日本には、木目込人形（例：江戸木目込人形（東京都・埼玉県））、衣裳人形（例：岩槻人形（埼玉県）、江戸節句人形（東京都）、駿河雛人形（静岡県）、京人形（京都府））、市松人形（例：江戸節句人形、京人形）や、御所人形（例：江戸節句人形、京人形）と、博多人形（福岡県）などの土製の人形、宮城伝統こけし（宮城県）などの木製の人形など、長い歴史のなかから生まれたさまざまな人形があります。

木目込人形は、絹織物などの布を貼って衣裳を着ているように見せている人形です。胴体部分は木材、桐塑などでつくります。桐塑は、桐のおがくずに生麩糊（でんぷん糊の一種）を加えて粘土状に練り上げたもので、これを松脂などで出来た型に詰め込んで型抜きし、温風で時間を掛けて乾燥させます。乾燥後は木材と同じように彫刻することもできます。形が完成した胴体に筋を彫り、そこに寒梅粉（米粉の一種）を水で溶いた糊を入れ、目打ちやへらなどを使って布の端をしっかりと押し込んでいきます。この動作を「木目込む」ということから、「木目込人形」と呼ばれるようになりました。頭や手足は、白雲土などの粘土を素焼きするか、または桐塑を成型したものに胡粉という白い顔料を塗ってつくります。胡粉は、カキ、ハマグリ、ホタテなどの貝殻を焼いて細かく砕いたもので、主成分はチョークなどと同じ炭酸カルシウムです。胡粉だけでは接着しないため、胡粉と膠とを練り合わせたものを湯で溶いて使用します。膠は、牛や鹿などの動物の皮や骨などを抽出して得られる動物性たんぱく質



で、水を加えて熱すると溶け、冷えると固まるという性質があることから、5000年以上前から中国やエジプトなどにおいて接着剤として使われてきました。胡粉を塗った頭に顔を描き、絹糸を植え付けて髪型を整え、胴体に取り付けます。

衣裳人形および市松人形は、藁、木材、桐塑などを用いて形づくった胴体に絹織物などの衣裳を着せ付けた人形です。頭や手足は木目込み人形と同様の方法でつくり胴体に取り付けますが、目にはガラスなどの義眼を用いることが多いです。衣裳人形は一般に衣裳を着せ替えることはできませんが、市松人形はもともと子供たちが遊ぶための人形であったため、手足が自由に動き、抱いたり座らせたり衣裳を着せ替えたりすることができます。

御所人形は、一般に木材、桐塑などでつくった本体に胡粉を塗って磨き上げた、童の姿の人形です。衣裳を着たものもありますが、多くは裸のままか腹がけ姿をしています。宮廷や公家の間で愛されたことや、御所から贈り物の返礼として大名などへ贈られたことから、「御所人形」と呼ばれるようになりました。

人形は一般に、胴体をつくり衣裳を仕立てて着せ付ける「胴着付師」、頭をつくる「頭師」、髪の毛を植え付け整える「髪付師」、手足をつくる「手足師」、また、人形に付属されている道具をつくる「小道具師」など、それぞれ専門の職人の分業によってつくられています。駿河雛具（静岡県）に代表される雛具も、木地職、挽物職、塗職、蒔絵職、飾金具職などの専門の職人によって、箆笥、長持、鏡台、御所車、高杯や椀などが本物と同じようにつくられます。人形づくりは、まさに日本の伝統工芸技術の集大成といっても過言ではないでしょう。（平成23年3月）

協力：(社)日本人形協会 <http://www.ningyo-kyokai.or.jp/>